

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520235

研究課題名(和文)「検閲」と文学言説の統制をめぐる超域的文化研究

研究課題名(英文)Transnational Cultural Studies on Censorship and Control of Literature Discourse

## 研究代表者

紅野 謙介 (KONO, Kensuke)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：20195671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：2014年8月、私たちは韓国の研究者とともに『検閲の帝国 文化の統制と再生産』(新曜社)と題した大部の論文集を完成させた。このなかで日本とその植民地であった朝鮮半島の検閲体制の差異、日本における敗戦と連合軍の占領下、またサンフランシスコ講和条約以降の歴史的变化を追究し、相互に関係し、補完し合っていることを明らかにした。2016年2月、ハングル版「検閲の帝国」を韓国で刊行。これを記念して、3月26日にソウルで編者5名および韓国側の執筆者、翻訳者、大学院生たちを前に講演を行い、質疑を交わした。「ハンギョレ新聞」や「京郷新聞」など韓国の新聞各紙で大きく書評にとりあげられるなど大きな反響があった。

研究成果の概要(英文)：We completed "the empire of censorship" (新曜社) in August, 2014. In this book we investigated the difference of the censorship system between Japan and the Korean Peninsula, and researched how the double system has changed in the postwar scene. We made clear that the system supplemented it mutually. In February, 2016, "an empire of the censorship" for Hangeul Alphabet was published in Korea. In commemoration of this, we held an international conference in front of five editors and writer, translator of the Korean side, graduate students in Seoul on March 26. It was greatly taken up with each Korean newspaper by a book review, and there was a big reaction.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本文学 近現代 検閲 韓国 植民地主義

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 文学研究とナショナリティの閉域

近代文学は当初から大きなアポリアを抱えていた。人もモノも言葉も、空間を横断することによって生み出され、その交差は拡大しつつけているにもかかわらず、国境で区切られた線のなかで文学が成立したという幻想を、みずからに言い聞かせ、確認しつつけなければならなかったからである。日本近代文学の研究においても、西欧化の影響は測定されながらも、東アジアとの複雑な関係が意識されるようになったのはこの十数年ほどのことである。かつて近代文学研究がアカデミズムのなかに位置を占めていく過程は、同時に日本の特異性を「発見」していくことと平行していた。

### (2) 文学研究における対話

こうした日本近代文学研究の閉域に風穴をあけるために必要なことは、外国籍の研究者による「日本近代文学研究」との対話もさることながら、そこにとどまることなくそれぞれの国民国家と密接な関係をもつ当該国の「近代文学研究」との対話である。それをひとまずは隣国、大韓民国に求めた。韓国近代文学の研究では、旧植民地時代の記憶から日本の痕跡を消去することが長く課題とされた。近代以前においても近代以降においても、濃密な交流・葛藤・軋轢の体験が積み重ねられたにもかかわらず、それらは片隅にうち捨てられていたのである。それぞれの近代文学、そしてその近代文学をめぐる研究の言説はいずれも国家の境界の内ので成立していた。

韓国人による日本近代文学研究も十分な質と量を持ってきているが、しかし、依然としてその大勢は「日本近代文学」の言説圏に接近することを目指してしまふ。そこで「日本近代文学」をめぐる外国人研究者が増えることを喜んでいたり、ナショナリティの陥穽から逃れることはできない。

むしろ、韓国近代文学研究者との積極的な対話を通して、あらためて「日本近代文学」「韓国近代文学」という対象とそれを自明のものとする言説をいったん括弧に入れ、双方の文学や文化に編み込まれている痕跡から、交渉と変容、折り返しやもつれを探ることとした。

## 2. 研究の目的

本研究では、東アジアにおける 19 世紀から 20 世紀にかけて帝国-植民地で展

開された「検閲」と文学言説の文化統制の実態究明、および日本と韓国、USA のあいだで激しく葛藤しながら織りなされた検閲制度の変遷と転移の歴史的過程を解明することを目的とする。歴史的に、1930 年までの内務省を中心とした「内地」検閲と「植民地」検閲の二重制度、1945 年までの帝国全土における文化統制と文学の総動員体制の成立、1945 年以降の日米の二重権力による文化の再編成と「検閲」の多極化、解放された旧植民地における韓米による「検閲」の維持と抵抗運動といった時期や地域に区切りながら考察する。

## 3. 研究の方法

「検閲」と文学言説の統制をめぐる超域的な文化研究を推進していくためには、まず韓国やアメリカで検閲研究を進めてきた研究者と連携し、国際的な会議での対話を重ねる必要がある。歴史的・地域的な偏差に留意しながら研究を進める一方、文学テクストを対象に検閲と文学言説の統制をめぐる研究方法の再検討を合わせて行った。また検閲制度をめぐる膨大な資料の読み込みとデータベース化、「改造」や「中央公論」といった日本国内で発行された雑誌や文学書の植民地への移動、植民地における日本語文献の受容と販売統制など、実地調査に基づく研究を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 研究のプロセス

2012 年度は、内務省関係や旧植民地地域の検閲関係資料の収集にあたる一方、9 月に論文集編集に向けた企画会議と研究会を開催。「日韓検閲国際会議 亀裂・痕跡・錯綜 検閲の拡張と変容」と題した研究会を開催した。

この会議と前日に行った打合せの会合を通じて、互いの研究主題を確認し、歴史的・地域的な偏差に応じた検閲制度と文学言説の統制をめぐる研究の方法的諸問題の認識共有をはかった。さらにその後、課題として浮上した問題点について、2013 年度にかけて東京とソウルで頻繁に連絡をとりあい、研究分担者である高氏のソウル行きなどをへて協議を重ねた。この結果、日本と韓国についての論点のずれや認識の重なり具合がより明確になった。同時に、こうした国際的な共同研究と同時に検閲関連資料の収集と調査を重ね、データの入力を行った。

2014年には、こうした研究会をへて、日本側から紅野謙介・高榮蘭、韓国側から鄭根埴（ソウル大学教授）、韓基亨（成均館大学教授）、李恵鈴（同左）の編集による論集『検閲の帝国 文化の統制と再生産』（新曜社、2014年8月刊、478頁）を刊行した。この出版物の製作費については、日本大学文理学部学術出版助成の補助を得て、内容的には本科学研究費補助金および日本大学人文科学研究共同研究費をもとに重ねられてきた研究実績をもとに作成した。韓国語論文の翻訳作業に本補助金の一部も使用させていただいた。

また刊行後の検証を兼ねて、8月、ソウルの成均館大学において合評会を開催、韓国内の研究者のみならず、アメリカからも研究者が参加し、同書の達成点と今後の課題について議論した。

2016年2月、ハングル語版『検閲の帝国』がブルン歴史社より刊行。こちらは全646頁に及ぶ大著となった。この完成を記念して、3月にソウルにて講演会を開催。参加者を通して、問題点の確認と可能性を議論した。なかでも中心となるのは、戦後の日本韓国におけるアメリカの存在であり、またアメリカと結び着いた日本、韓国それぞれの政府の協働「検閲」制度の問題である。それぞれは異なる思惑をもちながらも、結果的に戦後社会における「検閲」制度を協働して作りあげることになった。それまでの目に見える暴力的な「検閲」と異なり、自主規制や自己検閲への指向を強くした目に見えない「検閲」の成立と稼働の実態をとらえる研究がますます必要になったことを共有した。

## (2) 共同研究の成果

以下、成果となる紅野謙介・高榮蘭・鄭根埴・韓基亨・李恵鈴編『検閲の帝国——文化の統制と再生産』の部立てに即して説明する。

まず、第1部「検閲の拡張、揺れ、転移」と題して、戦前日本における「内地」の検閲と「外地」すなわち植民地の検閲の二重基準について調査と考察を重ねた。

- ① 鄭根埴 植民地検閲と「検閲標準」
- ② 紅野謙介 文学を検閲する、権力を監視する—中西伊之助と布施辰治の共闘
- ③ 韓基亨 「法域」と「文域」—帝国内部における表現力の差異と植民地テキスト
- ④ 十重田裕一 植民地を描いた小説と日

本における二つの検閲—横光利一『上海』をめぐる言論統制と創作の葛藤

⑤ 李鍾護 検閲の相転移、「親日文学」という過程

⑥ 高榮蘭 占領・民族・検閲という遠近法—「朝鮮／韓国戦争」あるいは「分裂／分断」、記憶の承認をめぐる

これらの研究を通して、1910～50年にかけて、日本と朝鮮半島の植民地時代から朝鮮戦争への時期に、それぞれの検閲制度は互いの接触する界面に「おいて変化をとげ、転移ともいうべき相互に折りたたまれた関係にあることを明らかにした。

ついて第2部の「検閲されるテキストと身体」では、個別のテキストやジャンルに強いられた検閲の痕跡を読み解くこととなった。

⑦ 金子明雄 「風俗壊乱」へのまなざし—日露戦後期の〈筆禍〉をめぐる

⑧ 李恵鈴 植民地のセクシュアリティと検閲

⑨ 内藤千珠子 目に見えない懲罰のように—1936年、佐藤俊子と移動する女たち

⑩ 李承姫 植民地朝鮮における興行市場の病理学と検閲体制—アラン症候群をめぐる

⑪ 小平麻衣子 誰が演劇の敵なのか—警視庁保安部保安課興行係・寺沢高信を軸として

⑫ 李旻柱 植民地朝鮮における民間新聞の写真検閲に関する研究—『朝鮮出版警察月報』と新聞紙面の対照分析を中心に

ここでは、政治思想ではなく、性風俗に関わる検閲が、個々のセクシュアリティや性的規範にいかに関わったかを分析し、それが小説一般の読書コードとどのように結びついたかを明らかにした。また、興行や演劇、写真などに検閲が残した痕跡をたどることによって、当時の人々が受けた暴力的なまでの力の結果をたどることとなった。

第3部は「アイデンティティの政治—検閲と宣伝の間」と題して、戦中から戦後にかけて、検閲されたテキストがアイデンティティの政治にいかに関わったかを追究した。

⑬ 五味潤典嗣 ペンと兵隊—日中戦争期戦記テキストと情報戦

⑭ 鄭鐘賢 ペテロの夜明け—植民地転向小説と「感想録」の転向語り

- ⑮ 榊原理智 移動と翻訳—占領期小説の諸相
- ⑯ 林京順 新たな禁忌の形成と階層化された検閲機構としての文壇
- ⑰ 鳥羽耕史 「原爆詩人」像の形成と検閲／編集—峠三吉のテキストが置かれてきた政治的環境

- ⑱ 藤井たけし ある『政治学概論』の運命—ポスト植民地国家と冷戦

ここでは、戦前戦中のテキストとその文脈を扱った⑬⑭の論文の他に、敗戦後に展開される日韓双方における情報統制のありようや、戦後における「原爆詩人」の表象の変遷、韓国の学術書がいかに歴史的な文脈によって改変されたかを検証した。

合わせて「日韓検閲年表」（尾崎名津子・孫成俊編）を作成。19世紀末から1960年代にいたる半世紀以上の歴史をふりかえり、相互の検閲をめぐる歴史的な出来事がどのように交錯するかを、年表形式で見えるようにした。

こうした研究を実質的にコーディネートし、共同の国際会議や研究会の開催を通して、実現したのである。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計6件)

- ① 紅野謙介、戦争の遍在／戦場の不在—『絢爛たる流離』のリダンダンシー、松本清張研究（松本清張研究会）、査読無、16巻、2016、p.p.55-62
- ② 高榮蘭、「原爆」をめぐる想像力の枠組み—ベトナム戦争と「アジア」言説を手がかりに、原爆文学研究（原爆文学研究会）、査読無、14集、2015、p.p.264-282
- ③ 紅野謙介、伊藤博文と安重根—テロリズムの地平、日本文学（日本文学協会）、査読有、63巻10号、2014、p.p.60-61
- ④ 紅野謙介、ジャーナリズムの変容と文学的「知」の配置—田川大吉郎と中里介山をめぐって、『岩波講座 日本思想』第2巻（岩波書店）、査読無、2013、p.p.181-214
- ⑤ 高榮蘭、〈朝鮮／韓国戦争〉あるいは〈分裂／分断〉—記憶の承認をめぐる、大東文化研究（成均館大学校）、査読有、79巻、2012、pp.63-91
- ⑥ 紅野謙介、原稿と活字のあいだ、日本近代文学（日本近代文学会）、査読有、87集、2012、p.p.111-115

[学会発表] (計5件)

- ① 紅野謙介、「キノコ雲」と隔たりのある眼差し—戦後日本映画史における〈原爆〉の利用法、原爆文学研究会、九州大学、2015年12月13日
- ② 高榮蘭、「社会主義」と「転向」をめぐる文化政治—一九三〇年前後の「社会主義」書物をめぐる競争／狂騒をてがかりに—、日本近代文学会、金沢大学、2015年10月24日
- ③ 紅野謙介、『大菩薩峠』の戦後—京大人文研と受容の軌跡、共同研究「戦後文化再考」プロジェクト会議、国際日本文化研究センター、2015年9月20日
- ④ 高榮蘭、革命と転向—吉本隆明「転向論」と林鐘國「親日文学論」の間から—、国際シンポジウム「日本の戦後70年を問う—戦後思想の光と影」、日仏会館、2015年7月19日
- ⑤ 高榮蘭、情動の枠組み—ベトナム／レイテ戦記の磁場から、「日本近現代思想史を書きなおす」第6回国際会議「戦後日本というアムネジア」、早稲田大学、2012年12月21日

[図書] (計2件)

- ① 紅野謙介・高榮蘭・鄭根埴・韓基亨・李恵鈴編、ハングル語版『検閲の帝国 文化の統制と再生産』、ブルン歴史社（韓国ソウル市）、2016年2月、全646頁
- ② 紅野謙介・高榮蘭・鄭根埴・韓基亨・李恵鈴編、『検閲の帝国 文化の統制と再生産』、新曜社、2014年8月、全478頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

紅野 謙介 (KONO, Kensuke)  
日本大学・文理学部・教授  
研究者番号：20195671

### (2) 研究分担者

高 榮蘭 (KO, Yonglan)  
日本大学・文理学部・准教授  
研究者番号：30579107